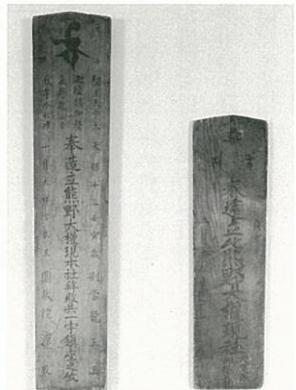


平成 19 年度企画展
こぼれ話

橋を守るのは誰? —ファンからサポーターへ—



戸張孤雁画「千住大橋の雨」(高田昭仁氏蔵)
大正 2 年(1913)。当時最後の木橋といわれた。



熊野神社棟札 2 点(素盞雄神社蔵)
右が貞享元年(1684)、左が天保 13 年(1842)のもの



千住大橋の床板の一部(大野喜一郎氏寄贈)
(縦 18.0 × 横 66.3 × 厚 8.5cm)

荒川ふるさと 文化館だより

荒川区教育委員会
荒川ふるさと文化館
荒川区南千住 6-63-1
TEL 03(3807)9234
登録(19)0053-2号

架橋と熊野神社 千住大橋(区指定史跡)は、徳川家康が文禄 3 年(一五九四)、江戸に初めて架けた橋です。架橋には、橋を命じられた伊奈忠次は、工事が難航したため、近くの熊野神社に成功を祈願し、成就の暁には社殿を修造することを誓いました。橋が無事完成したため、残材で社殿修復を行いました。以来、熊野神社は大橋の鎮守となつたと伝えられています。平成 19 年度に区登録文化財となつた熊野神社棟札(素盞雄神社蔵)の銘文からもその関係が窺えます。

当社の氏子は千住大橋 明治維新後間もない明治 4 年(一八七一)のこと、従来の寺詣制度に代わり、戸籍制度を補完する神社の氏子改めが導入されました(「大神社氏子取調規則」)。翌年に、熊野神社を含む千住宿内の神社の祭神・由緒・氏子・境内などの調査が行われています。それに対し、熊野神社は「氏子之儀者大橋ニ御座候」と回答しました。つまり、当社の氏子は「千住大橋」であると答えたのです(「千住口神社取調書上」)。

なんと、ウイットに富んだ回答でしょう。文禄 3 年以来、鎮守として千住大橋を守ってきた熊野神社の誇りが、宮司さんの筆を動かさせたのでしょう。昭和 2 年(一九二七)に鉄橋になつても、熊野神社は橋の南詰めに鎮座し、今日も千住大橋を護り続けているのです。

さて、昨年 12 月 12 日、千住大橋は、鉄橋化されて 80 回目の誕生日を迎えました。帝都の北のゲートとしての勇姿を見せる千住大橋は、初架から数えれば、413 歳江戸で最も長寿の橋といえます。

荒川ふるさと文化館では、足立区教育委員会、国土交通省東京国道事務所、岐阜県大垣市など関係各位の協力を得て、千住大橋鉄橋化 80 周年記念「千住で一番江戸で一番 千住大橋展」を開催し、3 千 400 人を超えるお客様をお迎えしました。展示や関連事業を通して、400 年以上にわたる千住大橋の歴史と文化を堪能していただきました。

展示開催の情報が伝わるやいなや、歌川広重の『名所江戸百景』の「千住の大はし」を手書きで模写した名古屋帯(田中さい氏蔵)をご持参頂き展示に加えることができました。また、鉄橋化の際に近隣に頒布された千住大橋の床板の一部で作つた記念品をお持ちだとのお声も届いていて、その関心の高さ、そして千住大橋ファンの多さに驚かされます。

荒川ふるさと文化館は、引き続き調査研究を進め、千住大橋の文化的価値を内外に周知し、区の誇るべき文化財「千住大橋」の歴史を未来に繋げていきたいと思います。千住大橋サポーターとしてのみなさまのご協力をお願いします。(野尻かおる)

【参考】 展示解説図録『千住大橋 80 周年記念 千住で一番 江戸で一番 千住大橋展』『文化館*ブックス 資料②あらかわ神社明細』

先日、とある人から隅田川駅（南千住四丁目）の写真を借りたいとのお申し出があった。そこで、引き込み線や貨車を引く機関車、倉庫が写った写真をお示しした。ところが、駅舎や人で賑わうホームが写っている写真が欲しいという。どうやら通常の人達が乗り降りするような駅を想定していたようである。

この隅田川駅、通常の鉄道路線図を見ても名称はでてこない。人が乗り降りする駅ではなく貨物輸送用の駅だからだ。しかし、隅田川駅が南千住に与えた影響は少なくない。そこで、少し昔の隅田川駅について見てみることにしよう。

隅田川駅の歴史 南千住は水運・陸運の中継地点と良く言われる。その象徴的存在が「隅田川駅」だった。

隅田川駅は、明治 30 年（一八九七）

4 月 1 日に、日本鉄道の「隅田川貨物取扱所」として南千住に開設された。当初は石炭のみを扱っていたが、薪炭や木材、さらに明治 34 年には「隅田川駅」と改称し一般貨物をも取り扱うようになった。開設 4 ヶ月後には、第一ドッゲが新設され、「石炭積卸場」や重機などが設置された。当時としては先端の設備が整つた貨物専用駅だった。その後、第二、第三ドッゲを開設、大正時代には拡張しクレーンの整備等を行い、活況を呈していた。

隅田川駅と石炭 隅田川駅では、様々な貨物を取り扱っていたが、その中心は石炭であった。この石炭は、どこからきて、どこへどのように運ばれたのだ

ろうか。明治 45 年から大正 2 年（一九一三）にかけての記録「東京に於ける石炭市場概要」を見てみよう。石炭は、外国や九州、北海道、磐城、常磐など様々な地域から東京へ入ってきた。外国・九州・北海道産は海路で横浜へ運び、そこから「はしけ」と呼ばれる貨物運搬用の船を使い各地へ運ばれた。磐城、茨城産は鉄道で隅田川駅を始めとする東京市周辺の駅に運ばれた。その後、市内へは河川を利用して、川から遠いところへは荷車を使ったという。

当時、東京市周辺の 19ヶ所の駅に入つてくる石炭は約 57 万 4 千トン。その内隅田川駅では 70 % にあたる約 40 万トンを扱っていた。隅田川駅について取り扱い量の多い新宿駅で 7 % にすぎないから、いかに多くの石炭を隅田川駅で扱っていたかが分かる。

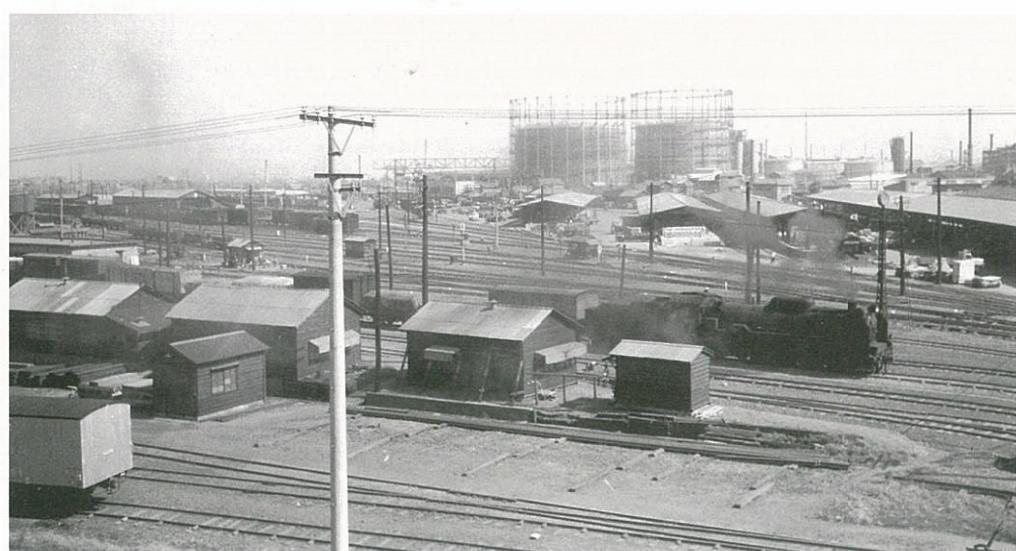
そして、当然のことながら石炭商が南千住には多く現れる。大正 3 年の『日本全国商工人名録』の北豊島郡と南足立郡部分に掲載された石炭商 6 軒はすべて南千住にある。また、大正 7 年の『北豊島郡誌』には、比較的大きな会社 3 軒が掲載され、「隅田川駅の開設に依りて大に繁盛を極むるに至」とある。昭和 31 年では、区内の石炭商 14 軒の内、11 軒が南千住に集中していた。

隅田川駅が抱えた問題 賑わう一方で、隅田川駅は二つの大きな問題を抱えていた。それは、①石炭の保管場所である貯炭場の確保と②石炭の価格の上昇ということである。

明治末には、隅田川駅は、東北諸鉄道の水陸主要駅として、石炭以外の貨物で構内がごったがえすよ

うになっていた。また、近隣に隅田川倉庫という大きな会社があつたが、そこでの取り扱いは、地金、線路用品、橋桁などが主で、貯炭場の確保には大変な苦労があつたらしい。

また、価格の上昇については、次のような理由があつた。磐城産の石炭は、本所区や深川区、あるいはその近辺の郡部の工場で使用されることが多くつ



昭和 30 年頃の隅田川駅。奥には東京ガスの円柱型のガスタンクが見える。

土の中の 荒川区④

町屋でまたまた発見！

近年、町屋四丁目周辺では、弥生時代末～古墳時代前期を中心とした、人びとの暮らしの跡が見つかり、出土・検出した遺物・遺構、土の様子などから一連の遺跡と考えられています（『荒川ふるさと文化館だより』15号、18号、19号参照）。

D地点とする)の調査を中心のご報告します。D地点は「町屋四丁目実揚遺跡」(以下、「実揚遺跡」とする)範囲の西端に位置し、前回調査したC地点から西へ50mほどの地点にあたります。



出土した須恵器。

元は1つの器で合わせるとほぼ完形になる。

かになつてくることでしょう。まだわかりません。現在、区内には7ヶ所の包蔵地がありますが、実揚遺跡内で本発掘調査を行う事例が多く、低地の中の微高地で遺跡の発見が続いています。実揚遺跡をはじめ、周辺の微高地上での発掘調査が進むことで、この周辺の歴史が徐々に明らかになつてくることでしょう。

たことで、遺跡が眠っていた面にまで工事が影響を及ぼし始め、本調査をする機会が増えたのです。ただ、これまで行われた実揚遺跡4ヶ所の本調査遺跡面積は約550m²に過ぎなく、そのうち約400m²はA地点が占めています。街なかの発掘調査は大変小さな面積のため、遺構全体を検出することもままならないことが多く、実揚遺跡の全容はま

を建てる際の事前調査は今まで行われてきましたが、遺構を伴う発見はなかなかありませんでした。ところが、平成17年に行われたA地点の本調査を皮切りに、同18年B地点、C地点と次々と見つかり始めています。遺跡が発見されるようになったのは、建物を建てるときに、深く掘削する工事が増えたためだと考えられます。ここ数年耐震面の強化で杭を打つたり、地盤改良をして建物を建てるようになつたことで、遺跡が眠っていた面にまで工事が影響を

になる土器で、「古墳—平安時代の青灰色を呈する高火焼成の焼き物」をいいます（『歴史考古学大辞典』吉川弘文館より）。

さて、町屋四丁目周辺が文化財保護法に基づいた周知の埋蔵文化財包蔵地（以下、「包蔵地」とする）となつて10年余が経過しています。包蔵地内で建物

須恵器とは、土師器より後の時代にみられるようになります。また、一方で北東から南西にわたって木材が敷かれた溝が発見され、そこから須恵器が発見されています（写真）。

た。隅田川駅から工場へ輸送するには、隅田川を利
用するのだが、ご存知の通り当時、隅田川の上流は
荒川でその名の通り「あらぶる川」であり、悪天候
の際にはとても船が航行できるような状態ではな
かつた。例え航行できたとしても運賃が高騰するこ
とがままあつたらしい。

これらの問題を解決するため 石炭商らは 用地確保ができ価格の上昇を押さえることが可能な本所駅—現在の錦糸町駅—へ石炭集積駅の機能を移そうとした。しかし、結局のところ実現はしなかつたようである。

水陸輸送の終えん 水陸輸送の中継地点として賑わった隅田川駅だが、水運を利用した貨物は、昭和20年代に80%だったのが、時代の趨勢とともに、昭和36年には17%に減少し、ドックも埋め立てられ衰退していく。当初80%を占めた木材・石炭の取り扱い量は、昭和43年には7%にまで減ったという。隅田川駅はコンテナ輸送の拠点へと性格を変え、セメントや紙の輸送が中心の駅となつた。

現在の隅田川駅は、もはや水陸輸送の拠点とはいえない。しかし、再開発に伴つて完成した区立瑞光橋公園には、隅田川駅や付近への浸水を防ぐために造られた汐入水門の一部が、移築されており、隆盛時の隅田川駅と南千住を知るよすがとなつてゐる。

【参考】「東京に於ける石炭市場概要」（『日本産業資料大系』）

り 13号) 等

れいし

お買いもの(2)

山梨県で『小塚原』?

再現された「小塚原刑場」。先日、「小塚原刑場」の様子を印刷した絵葉書が新たに当館に収蔵された（写真）。かなり過激な絵葉書である。だが、そういう印象に流される前に、この絵葉書は誰が何のために作ったのか、また絵葉書が作られた当時の社会的背景などを知つておきたいところである。

勿論、本物ではなくジオラマだからご安心を。獄門（手前）と磔（奥）という刑罰の様子である。獄門台の奥には捨札という罪状を記した木札、同じく右には杖（さず）という刑具と御用提灯が見える。背景の書き割りには木々が立ち並んでいる（実際は草むらだったが）。人形の顔・首は手の込んだ作りに見えるが、胸部は手抜きの感を否めない。



「全国民衆警察博覧会記念絵葉書 小塚原刑場」（当館蔵）

全国民衆警察博覧会 絵葉書一覧

- ① 小塚原刑場
- ② お兼火刑
- ③ 南旗玄旗
- ④ 鉄娘

展示だけではない。公衆電話室や記念スタンプが置かれた甲府郵便局出張所が設置され、連日「余興」と称する演芸大会が催される演芸場もあった。加えて、会場に「犯人」の名前が放送され、来場者がその「女給」を探すという「犯人探し」なるイベントも開かれた。一方、殉職した警察官・消防士を慰靈するための部屋も設けられ、線香が手向けられた。

全国民衆警察博覧会 このジオラマが何時・何處にあつたのかというと、昭和11年（一九三六）11月5日から22日までを会期として（実際には2日間会期を延長）、山梨県甲府市佐渡町（現、相生町一～三丁目の一～三）の丸三甲府繭糸商会で開催された全国民衆警察博覧会の会場であった（以下、同博覧会に関する記述は「山梨日日新聞」昭和11年10月25日号～11月27日号）。山梨日日新聞社主催、警察署後援の博覧会であり、本絵葉書は博覧会土産として会場内に設けられた主催者直営の売店において販売された。4枚一組10銭。内訳は一覧のとおり。(1)・(2)はジオラマだが、(3)は旧江戸町奉行所与力・同心の親睦会である南北会、(4)は明治大学刑事博物館が出版した陳列品である。その売れ行きは定かではないが、主催者の一押しの品々だったのだろう。

絵葉書①～④のみならず実際の博覧会には、2千点余の出品があり、刑事・消防・関所・交通・警務・特別出品・保安・建築・衛生というように、当時の警察行政を反映した分類がなされ、陳列された。出品者は、南北会・刑事博物館だけでなく、山梨県内外の旧家から、警察署にまで至り、有名事件の凶器などといった出展もあった。

そこで「小塚原刑場」のジオラマである。博覧会の目的に照らしてみれば、昭和11年当時の警察が民衆にとって身近なものであると感じさせるためには、江戸時代の刑罰を残酷なものとして位置付けが、主催者の意図するところであつた。

そこで「小塚原刑場」のジオラマである。博覧会の目的に照らしてみれば、昭和11年当時の警察が民衆にとって身近なものであると感じさせるためには、江戸時代の刑罰を残酷なものとして位置付けが、主催者の意図するところであつた。

現警察とは対比的に描く必要があった。そのためこのジオラマが作られたと思われるが、現在の私たちは、漠然とこのような対比を行つてはいないだろうか。一方、実際の小塚原刑場は「とすると、現在分かれているだけでも、刑罰「a」だけでなく、刑死者などの無縁の埋葬「b」、解剖「c」、刀の試し切り「d」、徳川家の馬の埋葬「e」の機能を有していた（『杉田玄白と小塚原の仕置場』）。ジオラマは(1)の復元であるから、aの機能のみが選択されたことを意味する。この「小塚原刑場」なるイメージは今日も支配的である。こういったイメージが社会に広がっていく過程では、案外こうした警察展覧会も一役買つていたのかもしれない。この絵葉書は、地域にとってのナイーブなこの問題を深くとらえて再考するきっかけになり得る貴重な資料である。



① 展示した地口行灯



② 祭礼に並ぶ地口行灯

とはいって、現在、街中で地口行灯を目にすることはかなり珍しくなりました。そこで、地口行灯の風習と地口絵の技術について、見てみましょう。

地口行灯とは そもそも、地口とは、江戸時代後半から近代にかけて流行った言葉遊びで、ことわざや格言など、当時人びとによく知られていたフレーズ

今の感覚では爆笑とはいいかないかもしれません

が、駄洒落を軽快に描き出した滑稽な絵柄からは、江戸から近代にかけての人びとの笑いのセンスが垣間見えます。

絵柄は、同時期に開催していた「昭和の号外」展にちなんで、「あとの号外先にたゞ」と「新聞かんぶん」という行灯です。もちろんこれは、「あとの後悔先にたたず」と「チンパンキャンパン」の駄洒落です。このようないいの行灯を、地口行灯といいます。

昨年 10 月から今年の 1 月まで、荒川ふるさと文化館の展示室入口に、駄洒落とともに、それにあわせた滑稽な絵の描かれた行灯が展示されていたのをご存知でしょうか。（写真①）

職 ごぼれ話 ③ 人

地口行灯と地口絵

絵柄は、同時に開催していた「昭和の号外」展にちなんで、「あとの号外先にたゞ」と「新聞かんぶん」という行灯です。もちろんこれは、「あとの後悔先にたたず」と「チンパンキャンパン」の駄洒落です。このようないいの行灯を、地口行灯といいます。

今に伝わる地口行灯 現在でも、わずかではあります。が、地口行灯を飾る風習は残っています。鎮守の祭礼で各地の神社などにみられる他、商店の軒先にも商売繁盛への願いを込めて飾られることもあります。

近いところで、台東区の千束稻荷神社では、いまでも毎年 2 月に行われる祭礼の際に、100 個近くの地口行灯が飾られます。夜には灯りがともされ、地口行灯と並ぶ

をもじつたものです。言葉のどこかが駄洒落になつていればよいという簡単なきまりであることから、誰にでも楽しめる言葉遊びとして流行しました。地口はやがて、地口絵として可視化されるようになりました。地口の文言をそのまま描いた滑稽な絵は、人びとの興味をひき、行灯や絵手本といった媒体を通して、広まりました。



③ 地口絵を描く様子

千束稻荷神社の地口行灯の絵は、楓絵師の今井鉄藏氏が描いていましたが、その技術は、荒川区の村田修一さんに受け継がれ、現在に至っています。（写真③）

村田さんは、提灯文字の職人であり、区内で提灯屋を営んでいます。村田さんは本業の傍らで、楓絵師の今井氏に師事し、その技術を修得しました。

楓の図案は下絵を代々引き継ぐことで、現在まで伝承されてきました。村田さんも師匠から 300 枚近くの下絵を受け継いでいます。冒頭の 2 つの地口行灯の絵も村田さんの作品です。

下絵をもとに、絵の輪郭線や地口の文言を書き、刷毛で彩色し、最後に瓶垂れ霞（びせりゆき）という赤と青のギザギザの横線を引いて絵を仕上げます。できあがった地口絵は神社に納められ、行灯に仕立てられて祭礼で飾られることになるのです。

平成 19 年度、この地口絵の技術は、新たに荒川区の登録無形文化財となりました。今では都内でも地口絵を描く職人は少なくなりましたが、江戸・東京に残る古くからの風習を支える技術のひとつといえます。

（澤田善明）

【参考】『地口行灯の世界』（足立区立郷土博物館編、平成 17 年特別展図録）など

今日の日本は、世界に稀にみる自動販売機大国である由。そんなありふれた自動販売機も、明治 43 年（一九一〇）の南千住、しかも第一瑞光尋常高等小学校にあつたとなれば興味深いことこの上ない。さらに鉛筆・筆・半紙・画用紙・雑記帳・消しゴムなどといった文房具が売られているという今ではお目に掛かることができない珍しい「自動販売機」なのだ。

ただ、「自動販売機」といつても、あるのは棚と 2 つの箱と用紙だけ。仕組みはこうである。この棚は文房具が並べられた陳列棚で料金は箱へ入れる。お釣りがある場合は、五厘銭が入っているもう一方の箱から自分で取り出す。そして用紙に品名・単価・数量等を書き込む。手持ちのお金がない生徒は、この用紙に名前・学年・組・品名・金額・月日を記せば後払いで購入可。但し、購入できるのは、尋常小学校六年生以上とされ、高等科と尋常科の生徒がそれぞれ 2 人づつ運営を担当した。

自動販売機というより無人販売所に近いが、実は教育の一環でもあったという。名づけて「自動販売法」。正常に運営されるには、購入者が偽りなくルールを守つていかなければならぬ。そんな道徳的精神を養うという教育法なのである。もつとも、教育効果のほどはわからないし、いつまで続いたのか不明であるが、お金が盗まれることもなく、滞りなく運営され、昭和初年までは続いたようである。少なくとも——これもまた当たり前の風景である——学校周辺の文房具屋ができるまで。

（亀川泰照）

あらかわ タイムマシン 明治の「自動販売機」

第一瑞光尋常高等小学校の場合



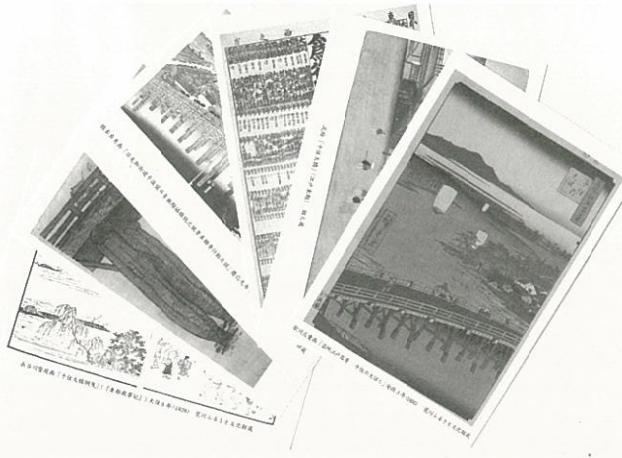
文化館でお買い物

■ミュージアムグッズ

今回ご紹介するのは、ご好評いただいている千住大橋絵葉書です。平成 19 年度企画展「千住で一番 江戸で一番 千住大橋展」で展示された千住大橋の絵画資料 6 点を絵葉書にしました。

歌川広重画「名所江戸百景 千住の大はし」をはじめ、泥絵の「千住大橋」、見立番付の「日本大橋尽し」、橋本貞秀画「日光御街道千住宿日本無類楠橋杭之風景本願寺行粧之図」、戸張孤雁画「千住大橋の雨」、「東都歳事記」（千住大橋綱曳の部分）、以上 6 枚組となっています。

その他、「千住製絨所絵葉書（6枚組）」（220円）、「あらかわと寄席一筆箋」（190円）、「あらかわとお野菜ぱち袋（5枚組）」（250円）も販売しています。



千住大橋絵葉書（6枚組）110円

■図録再版のお知らせ

昨年 3 月、完売しました平成 18 年度企画展「杉田玄白と小塙原の仕置場」の展示解説図録（330円）が、この度再版となりました。

※展示室入り口で販売しています。また、通信販売も受け付けています。詳しくは、荒川ふるさと文化館までお問い合わせください。（TEL 03-3807-9234）

開館 10 周年記念事業のおしらせ

荒川ふるさと文化館は平成 20 年 5 月 1 日に開館 10 周年を迎えます。そこで平成 20 年度は記念事業として、「荒川ふるさと文化館 10 年の歩み & 速報！あらかわの文化財」展、国重要無形文化財保持団体松本社中による「江戸の里神楽」の公演 & 特別講演会、子ども向けにあらかわの歴史や伝説などを紹介する『あらかわ今昔ものがたり』の刊行、「開館 10 周年記念文化財講座」を予定しています。